

リア

岸田理生

■ 登場人物

老人

長女

次女

琵琶法師

若い道化

老婆の道化

忠義者

家来

母（実は老人）

母（花）

虚栄（長女の影法師）

不測（長女の影法師）

野望（長女の影法師）

家来の影法師たち

音の精霊たち

地の母たち

プロローグ

激しい嵐が熄んだ後の静寂。

空間は闇に閉ざされている。

やがて一筋の光が射し込んで来ると、半ば朽ちかけた避幕の庇の下で、不幸せに死んだ人々に対する鎮魂歌を弾き語りしている一人の琵琶法師の姿を浮かび上がらせる。

鎮魂歌

春に花 夏に夕立ち

秋は枯れ葉の 冬に風

帰命頂礼 解れども

鬼神の力に 逆らえず

生きるも地獄 死も地獄

生きる地獄を 選ぶより

死んで願いを 適えし者よ

家で死ねずに 野に死んで
地獄の苦役の 終わる日あれば
再び地上に 甦り
人のさだめを 生きなされ

やがてその日が 来るまでの
南無 阿弥陀仏 阿弥陀仏
南無 阿弥陀仏 阿弥陀仏

琵琶法師が弾き語る間に、ぽつりぽつりと明かりが灯り、点在するへ音の精霊たちの姿が浮き出てくる。

やがて琵琶法師の鎮魂歌が終わると、一人のへ音の精霊が吹く笛の音とともに、避暑の戸が鈍く軋みながら開き、一人の老人（亡霊）が蹠踉とした足取りで現れて来る。驚愕し、老人を凝視する琵琶法師。

琵琶法師 誰だ？

老人は、しばらく無言でいるが、

老人 ……私は誰だ？……。

自問し、ぼつぼつと、

老人 私は死の眠りを眠っていた。思い出すことの出来ない悪夢に襲われながら眠っていた。私は確かに死んでいる。だが同時に悪夢の中で生きている。法師殿の弾く琵琶の音に甦った私。法師殿、どうか私の悪夢の根を絶ち、私を成仏させて欲しい。

琵琶法師に訴え、間を置いて再び自問する。

老人 ……私は誰だったのか？……。

老人の問いかけに答えるようにして、一人の娘（亡霊）が現れ、

娘 お父様……。あなたは私の父です。

と、告げる。

老人 父とは何だ？

娘 私を作ってくれた存在。私はあなたの愛の滴りから作られた、はじめての娘。私の中には三人の私があります。さあ、出ておいで。

その呼びかけに現れて来る長女の影法師たち。一人は野望、一人は不測、一人は虚栄。三人の影法師たちは、それぞれ違った言語で、老人を父と呼ぶ。

長女 一人の私は従順。

影法師（野望）が、お辞儀をする。

長女 一人の私は清純。

影法師（不測）が、お辞儀をする。

長女 一人の私は無垢。

影法師（虚栄）が、お辞儀をする。

長女 四人の私はいつでも私の心と体をお父様にお返しします。

と、現れてくる、もう一人の娘。娘は無言で、唯、笑み、父を瞞める。

長女 この子は、あなたの二番目の娘。あなたの愛の残り滓。この子は、いつも無言。心の中で何を企んでいるのか、誰にもわかりはしません。

次女は微笑したまま立っている。

頻りに何かを思い出そうとするように次女を凝視する老人。老人と次女の視線の糸を断ち切ろうするように長女は言う。

長女 お父様……王であったお父様。あなたは玉座から降りたいと仰言る。わかりましたお父様。

私はお父様の代理となります。

老人 私は王だったのか？

長女 はい。

老人 ……王とはなんだ？

長女 力です。

答える。

と、二人の道化が、それぞれ違った方向から現れる。
一人は老婆の道化、一人は若い道化である。

老婆の道化は、老人と二人の娘を見て驚き。

老婆の道化　ひゃあ、びっくり。びっくり提灯、火がついた。……お城の方々じゃないかね。皆、死んだと聞かされていたが、生きていなすったんだね。そんなら昔のように道化踊りをひとくさり。

と騒ぎ始め、若い道化は奇妙な道化節で囃し立てる。

道化節 I

王とは生贄たちの上に立つ者

よっころしよ　どっこいしよ

生贄たちの呻き

うんこらせ　よっころせ

もひとつおまけに　よいとまけ

搾れるものは　搾り取り

へいこら　よいこら　なんじゃこら

残りの滓で飼い殺し

餓じ 餓じと泣く赤児

乳が出ないと泣く母御

おねげえしますに耳貸さず

とれとれ とれとれ 搾り取れ

それを命じる 王だった

従わせるのが 王だった

あなたは王様

王様だった

若い道化の道化節が続く間に、天井からは不在の玉座が舞台中央に降りてくる。

忠義者が現れ、老人に旅支度をさせる。へ音の精霊へは老人の傍らにいる。

避幕は解体され、琵琶法師は姿を消す。

長女の影法師たちは、従順、清純、無垢と名指された名を裏切るように、歪んだ動きをしている。

次女は立ち尽くしている。

老婆の道化は踊っている。

長女は、さまざまな出来事を支配する眼で見守っている。

道化節が終わると、長女は老人に言う。

長女 父であり、王であるあなた。私はあなたにすべてを捧げます。そして何より、あなたにへ自

由の愉しみを贈ります。あなたは、あなたの忠義者と二人の道化を連れて、日夜を分たず、

旅の愉しみに耽るだけでいいのです。

旅支度を終え、破顔する老人。

老人は次女に訊く

老人 上の娘は私に約束の言葉をくれた。さて、お前は、どんな言葉をくれる。

だが、次女は何も答えず、微笑を贈るばかりだ。
怒り出す老人

老人 言葉はどうした、言葉は？ お前が私の娘なら、私はお前に言葉を教えた筈だ。言葉によって、人は理解し合い、また、契約する。お前の沈黙は、闇。私に対し、何の約束もしない、ということだな。わかった。では私はお前から、娘という言葉を剥ぎ取ろう。出て行くがい。追放だ。誰よりも可愛がっていた、娘。お前はもう、私の娘ではない。

そう宣告されても次女は無言のまま。寂しく立っている。

老人の言葉が続く間に出て来る、長女の家来と家来の影法師三人。

家来は長女に、家来の影法師たちは長女の影法師たちに、ぴたりと寄り添う。

長女 楽しい旅をなさって下さい。お父様。

老人 ああ、ありがとう。

長女 そして、いつでも帰って下さい。あなたの玉座は、空けて置きます。私は、唯、あなたの代理。決して玉座には座りません。

頷く老人。老人は忠義者、二人の道化を連れて笑顔で旅に出かけて行く。へ音の精霊も老人に添って行く。

それを見送る長女、家来。それぞれの影法師たち。大袈裟な歓送の行為をする。

次女は、そっと手を振る。

老人一行の姿が見えなくなると、いきなり哄笑する長女。長女は何の逡巡もなく玉座に座る。傍らに立つ家来。

長女は嘲る眼で次女を見、言う。

長女 約束の言葉は、いつだって煙のように消えてゆくものよ。それがわからないなんて、何と愚かな老人！ そして沈黙こそが美德だと信じている愚かな、あなた！ 言葉は武器よ。生き残るための、唯一の手段よ。私は勝った。言葉で勝った。

そして長女は家来を抱き寄せる。

長女 私には味方がいる。家来がいる。あなたには誰もいない。一人ぼっちの家なき児。あなたは、どうやって生きて行くの？ さあ、さっさと、出てお行き。

出てゆく次女。

長女の言葉が続く間、影法師たちは、艶しく絡み合っている。

長女から老後を保証された信じ込んでいる老人が、あちこちに視線を投げながら、忠義者、二人の道化を従えて現れ、へ音の精霊もまた姿を見せると、楽し気に笛を吹く。不意に、若い道化が、

若い道化 あんたは誰だい？

と、椰楡うように訊く。

驚く老人。咄嗟には答えられない。

若い道化 玉座を空っぽにした、あんた。今のあんたは誰なんだい？

再度、訊かれ、笑う老人。

老人 そうさな。今の儂は、まずまず幸福な老人、というところだな。
若い道化 何故？

老人　まず、帰る家がある。

若い道化　それから？

老人　従順、清純、無垢と三拍子揃った娘がいる。充分、満足、悠悠自適。それが儂だ。

老人は、忠義者に、

老人　お前は誰だ？

と笑いかけ、訊く。

忠義者　私はいつでもあなたです。あなたが怒る時、私は怒り、あなたが喜ぶ時、私もまた喜びます。そう、私はあなたです。

笑顔で答え、老婆の道化に、

忠義者　お前さんは、誰だい？

訊く。

老婆の道化 一体、誰が、自分が誰かを答えることが出来るというんだい？ 私は、誰でもない

よ、まだ。

忠義者 まだ？

老婆の道化 多分これから自分になって行くんだろさ。

答え、若い道化に、

老婆の道化 お前は誰だい？

訊く。

すると、若い道化は、それぞれに真情を吐露した老人たち三人を相手に、道化節で答える。

道化節 2

俺は 豚肉 牛の肉
鳥肉 犬肉 猫の肉
猿 雉 河馬 鹿 鰐の肉
熊 亀 鼈 馬の肉
そしておいらは 人の肉
生肉 挽肉 死んだ肉

道化節が終わると、老人、忠義者、二人の道化は、「お前は誰だい？」と浮かれた調子で訊き合い、大声で笑いながら去ってゆく。

へ音の精霊もまた、楽しい笛の音の余韻を残して出てゆく。

この場面の間、玉座に座って戯れている長女と家来、その足許でふざけ合っている、それぞれの影法師たちの姿が朧げに見える。

一人ぼっちの次女が現れると、無言のまま、死んだ母に救いを求める踊りを踊る。その舞踏は、次のような意味を持っている。

私が幼な児だった頃

母が私に訊いた

“大人になったら、何になるの？”

私は答えた

“人になるの”

すると母は教えてくれた

春が血の中を小川のように流れ

とく とく とく とく

小川の近くの丘には

連翹 躑躅 桜 桃

永い冬に耐えた私は

花のように甦える

愉し気な雲雀は

どの畑の どの畝からも舞い上がり歌う

青い空は暖かく高い

母は私に教えてくれた

春は来る と

必ず来る と

春の母さん

私の母さん

今の私は 家なし児

救って下さい

救って下さい

一人ぼっちは寂しすぎます

すると次女の舞踏に答えるようにして、母とそして地の母たちが現れて来る。

母は、老人を演じる俳優と同じ俳優によって演じられ、また、二人の娘がまだ子供の頃に死んだ存在であり、従って、若いまま登場する。

次女、地の母たちとともに、老人との出会いの歌を歌う母。

母の歌

廻り 廻りし 糸車

粹粋輪を賤の女の

営む業にてさん候

真麻苧の糸を繰り返し

真麻苧の糸を繰り返し

賤が積麻の夜までも

世渡る業こそもの憂けれ

けれど出会いし その人は

運命の糸の糸車

糸桜 色も盛りに咲く頃は

繰る 繰る 繰る 繰る 糸を繰る

来る 来る 来る 来る 人が来る

糸の三日月 待ちぬらん

満月までを 待ちぬらん

その人 来るを 待ちぬらん

まわり まわりし いとぐるま

わくかせわをしずのめの

いとなむわざにてさんぞうろう

まさのをいとをくりかえし

まさのをいとをくりかえし

しずがうみそのよるまでも

よわたるわざこそものうけれ

けれどであいし そのひとは

さだめのいとのとぐるま

いとざくら いろもさかりにさくころは

くる くる くる くる いとをくる

くる くる くる くる ひとがくる

いとのみかづき まちぬらん

まんげつまでを まちぬらん

そのひとくるを まちぬらん

(わくかせわ↓糸を繰る車

しずのめの↓、貧しい女と「する」という意味の動詞の掛け言葉

まさを↓美しい麻

うみそ↓麻を細く引き裂いて撚り合わせた糸

よるまでも↓夜と撚るとの掛け言葉

よわたる↓世と夜の掛け言葉

いとざくら↓しだれ桜)

糸車がまわり 私たちは出会った

糸を紡ぐことが仕事の 貧しい私

美しい糸を紡ぎ

美しい糸を紡ぎ

夜になっても糸を紡ぎ
働かなければならない

けれど、私は出会った
運命の車が廻って出会った

糸のように咲く桜が満開の頃

私は糸を紡ぎ

あの人を待ち あの方は来た

そして私は糸のように細い

三日月を待つようになった

三日月が満月になるまで

待つようになった

あの人があるのを待つようになった

玉座に座り、次女、母、地の母たちの出来事を見ていた長女は、

長女 消えて！

と、叫ぶ。

長女 糸を紡ぐのが仕事の貧しい女だった、あんた。死ぬまで日陰者だった、あんた。王妃にはなれなかった、あんた。私の中に流れているのは父の血だけ、王の血だけ。あんたの血なぞ、唯の一滴、流れてはいない。

母、次女、地の母たちは、長女と家来の影法師たちによって、家畜のように追ひ払われる。

母、次女、地の母たちが追ひ払われると、長女は、

長女 私は力が好き。

言っ て家来と家来の影法師たちを呼び集める。

長女 さあ、来て。私の味方たち。私の前で力競べを見せて頂戴。

集合する家来と家来の影法師たち。

長女の影法師たちは、玉座に近付く。

長女 始めて！

命じる。

競技が開始される。

それを盛り立てる太鼓が鳴る。

三人の影法師たちを相手に勝ち続けて行く家来。

長女の影法師たちは、力競べに呼応するように動いている。

競技の途中から現れて来る老人、忠義者、二人の道化。そしてへ音の精霊。

老人は、玉座に座っている長女を見て、一瞬驚くが、まだ娘の裏切りには気付かず、立
ったまま、競技を見物する。

忠義者は、背負っていた箱から、折り畳んだ椅子を取り出し、見物席を作り、老人にす
すめるが、老人は、大丈夫だ、と、座るのを断り、玉座を指す。

頷く忠義者。

老婆の道化は面白そうに競技を見ているが、若い道化は、巫山戯半分、競技の真似事
をしている。

やがて勝利する家来。

老人は、玉座に近付き、家来を招き寄せる。やって来る家来。

老人は懐中から、小刀を取り出し、

老人 勝者には王より褒賞を与えるのが習いだ。受け取るがいい。

言っで与えようとするが家来は受け取ろうとはせず、長女を見る。

思わず長女を見る老人。

長女は、冷たい眼で老人を見る。

老人の顔色が変わってゆく。

長女 あなたは既に玉座を降りた人。王の名を捨てた人。それから、娘に見捨てられた老人。
老人 見捨てた……、と言ったのか？

信じられずに訊く。

長女 はい。

老人 ……しかし、お前は……。

長女 私は？

老人 帰って来てください、と、言った筈だ。玉座は空けて置く、と約束した筈だ。

長女 年が変れば、すべては昔。

笑う。

言葉を失う老人

長女 今日、今日、玉座に座るのは私、褒賞を与えるのは私。

家来を呼ぶ。

長女 私は褒賞に武器など与えたりはしません。私の褒賞は、これ。

家来に口づけをする。

震えながら、その出来事を見ている老人。

長女の影法師たちもまた、家来の影法師たちに口づけをする。
眼を逸らせる忠義者。

呆気にとられて眼を離す老婆の道化。

若い道化だけが、出来事を嘲るように口づけを真似ている。

長女 あなたは私の家来。そして私の男。

頷く家来。

それから長女は老人に訊く。

長女 帰って来たのですか？では、あなたの部屋を用意させましょう。馬小屋がいいですか？

それとも牢獄がいいですか？

老人は身動き出来ずにいる。

〈音の精霊〉が寂しい曲を奏しはじめる。

老人を背負う忠義者。歩き出す。

付いてゆく老婆の道化。

若い道化は、長女に手を振り、嘲笑しながら付いてゆく。

〈音の精霊〉に先導されて去ってゆく老人の一行。

長女、家来、長女の影法師たちは、勝ち誇った表情でそれを見ている。

老人の一行は、荒野で、寂しさを紛わす宴を開いている。

老婆の道化は老人の盃に酒を注ぎながら、慰めるように言う。

老婆の道化

人が生きられるとて 何百年 生きられようか

しみつたれた世の中ながら ほいほいと生きてみよう

世間峠は 険しいものさ 曲がりくねって涙を誘うが……

だが老人は茫然としている。

忠義者

去ってしまったのか 情を交わした人は

雁とともに永遠に去ってしまったのか

空を飛びゆく 雁に問わん

私の道は いずこにあるうか

忠義者の言葉は老人の胸中に去来するものを代弁するように沈んでいる。

と、へ音の精霊が、寂しさを吹き払うように奏しはじめる。
それにつられて歌う老婆の道化。

老婆の道化の歌

戯れて行かれよ
戯れて行かれよ
戯れて行かれよ
月が浮かんで沈むまで 戯れて行かれよ

忠義者も笑顔となり、歌う。

忠義者の歌

寒いか 暑いか
私の腕に入るがいい
枕は高いか 低い
私の胸を枕にするといい

それから二人は合唱する。

老婆の道化と忠義者の歌

西の山に沈む夕陽は
沈みたくて 沈むのか
私を残して 去る君は
去りたくて 去るのか

老婆の道化は皆を励ますように言う。

老婆の道化 果てしなき 大海原に

ぽっかりと 浮かんだ船

えんやら やあ

えんやら やあ

えんやら ころと 櫓を漕がん

忠義者と老婆の道化が言葉や歌で老人を慰めている間、若い道化は、さも退屈したように、また、老人の視線を惹き寄せるように、若さを誇示する行為をしている。そして老人の眼は、いつしか、若い道化を見るようになっていく。やがて、忠義者と老婆の道化が沈黙し、へ音の精霊が笛を吹きやめると、若い道化の道化節がはじまる。

道化節

この世は 狂気 狂気 狂気

引っくり返らないことなぞ

何もない

へ制度 観念 家父長制

俺はすべてを引っくり返す

逆立ちすれば 天は地 地は天

俺が親から貰ったものは

引っくり返しの その力

そうして俺は誰の子だ

へ当然至極 泰然自若

俺は誰の 子でもない

とんぼがえりをして見せる若い道化。

老婆の道化 誰でも人は、誰かの子……さ。

呟く。

すると若い道化は老婆の道化を揶揄し、

若い道化 そうしてやがて子は親になり、子の親は老いて、子に頼らざるを得なくなる、って訳

かい？ えっ？ 一人ぼっちの婆さん。

訊く。

頷く老婆の道化。沁々と、

老婆の道化 子に裏切られた親程、哀れな者は、いない……さ。

肩をすくめる若い道化。老人を唆すように、

若い道化 娘に裏切られたと嘆くんなら、今度は、あんたが裏切り返せばいい。玉座を奪われたと憤るなら、取り返せばいい。この世は、狂気、狂気、狂気。引っくり返らないことなど、何もないんだぜ、えっ？ 爺さん

老人の表情に浮かんでくる生氣。

老人 ……裏切り返す……取り戻す……。

自分に言い聞かせるように呟く老人。

老婆の道化が、ぽつりと、

老婆の道化 無理だよ。

言う。

しばらくは沈黙しているが、不意に老人が声を荒立てる。

老人 出て行け。

驚愕する老婆の道化。

老婆の道化 何だって？

老人 私には輩がいる。隣の国。そのまた隣の国……。彼等は皆、王だ。王が持つもの、それは力だ。彼等は喜んで私に力を貸してくれる筈だ。

老婆の道化 わかるもんかね。

老人 気力を挫こうとする、お前。老婆。出て行くがいい。

何か言いかけようと目を開き、だが、何も言わずに背を向け、とぼとぼと去って行く。

その後姿に向かって、陽気に、

若い道化 あばよ、婆さん。今度、会う時にゃ、地獄で会おう。

告げる。

沈黙したまま、忠義者は、寂し気に老婆を見送る。

へ音の精霊へもまた、黙したままだ。

不意に立ち上がる老人。

老人 行くぞ。

若い道化 合点。

老人、忠義者、若い道化は老婆の道化が去ったのとは反対側の方向に去ってゆく。

ついて行くへ音の精霊へ。

この場面の間、中央の玉座に座した長女が家来、長女の影法師たち、家来の影法師たちとともに、乱れた酒宴を催している光景が仄見えている。

次女と、地の母たちが糸車を手に現れると、糸を紡ぎはじめる。
静かに奏される音楽。

そこへやって来る老婆の道化。次女と、地の母たちは笑顔を見せ、やさしく老婆の道化を迎える。

老婆の道化 仲間入りさせて貰っていいかね？

頷く、次女と、地の母たち。

老婆の道化 ありがとさんよ。一人旅は時々寂しくってねえ。……よっこらしよ、っと。

座って糸紡ぎを眺める。

地の母たちの一人（花）は、糸紡ぎを続けながら言う。

花 夫の父母は やさしくても他人 つかえなければならぬ人たち

地の母たちは合唱で答える。

地の母たちの合唱

昼の間は遊べないから

月の真下で遊ぼうよ

花は言葉を続ける。

花

星を掴まえ 模様に入れて きりきりばったん 織りましよう
釜に火をつけ 御飯を炊いて 空にも 星にも 捧げましよう
友も喜び 広場に集い みんな嬉しく 遊ぶでしよう

地の母たちは歌う。

地の母たちの合唱

松林には 松がいったい
竹林には 竹がいったい

気持ち良くなって、ふっと口を挟む老婆の道化。母が姿を見せる。

老婆の道化 月が降りる時、老いた松は語るでしょう

昔昔の女たちの話を 昔昔の昔話を

母、次女、地の母たちは、暖かく老婆の道化を見守っている。

この場面の間、玉座の酒宴は終わり、長女と家来は密談をはじめ。

寄り添い合って聞いている、長女の影法師と家来の影法師たち。

語り終わった老婆の道化は立ち上がる。

母 どこへ行らっしゃるのですか。

老婆の道化 あんたは、母。あんたたちは母たち。だけど私は、生まれては来たものの、母にはなれなかった、いや、なろうとしなかった女。老婆。いつまでも仲間入りをしているのは性

に合わない、さ。茶飲み友達でも探しに行くさ。いや、酒飲み友達か。

母 強いてとめはしません。でも寂しくなったら遊びに来てください。

老婆の道化 ああ、そうするよ。私にも母があった。そのことを思い出せる場所があるのは、悪くない……。お礼を言うよ。ありがとさん。

老婆の道化は、笑顔で、母、次女、地の母たちから遠ざかって行く。

照明が変わって行く間に去って行く、母、次女、地の母たち。

玉座で抱き合っている長女と家来。

玉座の下で抱き合っている、長女の影法師と家来の影法師たちの姿が浮かび上がる。

長女と家来は囁き合う。

長女 昼の時間から夜の部屋に戻り、私は明かりを消す。明かりをつけたままではいるのは、疲れること。

家来 どんな季節でもない朝に、蕾は開いた。愛は獣とともに、花は毒を持って生まれた。

長女 父は昼の光に姿を現す。生きている父。すると、陽光の許、私は落ち着くことが出来なくなる。

家来 死は絶対。生者が死者に脅かされるなど、臆病者に起きること。あなたは強い女。

長女 私は楽しみたい。若い内、若い内、若い内に。

家来 ……殺す、のです。父を……。そうすれば……、

長女 そうすれば？

家来 あなたは、

長女 私は、

家来 真の王となる。

長女 力を、自由を、得ることが出来るようになる。

家来 昼の鏡に互いの裸身を映し、愛し合うことができる、若い内に、殺すのです。

長女 父を……。

家来 殺すのです。

長女 父を……。

家来 殺すのです。

長女 父を。父を、殺す。父を、父を……。

闇の出来事の中で、長女は、父殺しを決意する。

長女 明かりを消して。眠りましょう。

長女と家来の姿は影絵となる。

長女 暗闇の中で私は私になる。暗闇の中で、お前の息遣いを感じ、私はふと思う。今は規則正

しい、お前の呼吸が、いつ裏切りの寝息に変わるか、と。暗闇の中の逡巡いと途惑い。そんな時、私は急いでお前を抱く。

家来 暗闇の中で、私はあなたの寝息を確かめます。私はあなたの眠りを守る下僕。お休みなさい、私の王。私の、女。

老人と忠義者と若い道化は荒野を彷徨している。

その姿は孤独と寂寥に満ちている。

老人 輩にも裏切られた。

忠義者 時代が変わったのです。

老人 輩は死に、

忠義者 そうでなければ息子たちに王位を譲り、成すべきもない日々を送っておられる。

老人と忠義者は言う。

老人 忘却の河のほとりで、

忠義者 忘却の河のほとりで、

老人 私は歌いたい。

忠義者 私は歌いたい。

老人 栄華の日々を。

忠義者 栄華の日々を。

するとへ音の精霊へが歌いはじめる。

へ音の精霊への歌

月明かりのもと

私の姿は暗い

だが私は歩きまわらずにいられない

いつも孤独で

無限に酔い

永遠に追放され

歩きまわる 私

失われた王

月は照らす
無人の荒野を
すべてが眠っている

私は歩く
一人歩く

両足が痛む

過去を噛みしめ
急激に老い

私は
夜の
中に
沈む

老人と忠義者はくり返す。

老人 私は

忠義者 私は

老人 夜の

忠義者 夜の

老人 中に

忠義者 中に

老人 沈む

忠義者 沈む

二人が口を噤むと現れてくる幻の次女。

老人には彼女が生まれたばかりの赤児のように思われ、抱きしめる。

嬉し気に、その光景を見、座る忠義者。

老人と次女は、へ音の精霊の奏する調べに乗って、ゆっくりとワルツを踊る、踊る、踊る。

幻想の場面。

やがて幻の次女は消えてゆく。

この場面の間、凝っと出来事を見ている玉座に座る長女、長女に寄り添う家来、そして玉座の足許に座る、長女の影法師たちと家来の影法師たちの姿が朧気に見えている。若い道化は終始無言で、出来事を見ている。その様子は、自らの老いについて考えているようにも見えるし、すべてに見捨てられた老いについて考えているようにも見える。

へ音の精霊への唄が終わると、いきなり関の声が上がり、長女の影法師と家来の影法師たちが、手に手に武器を持って、沈黙している老人一行に襲いかかってくる。

忠義者は、自分にとっての唯一の武器である剣を手に戦い、若い道化は自分が生きるための武器として来たへ言葉で戦う。

成すすべもなく、その出来事を見守っている老人。

へ音の精霊へは、笛を吹いて忠義者と若い道化を鼓舞しようとするが、激しい太鼓の乱打の音に負けてしまう。

若い道化は知る限りの罵倒語を叫ぶ。

若い道化の罵倒語―

こん畜生	糞ったれ	ろくでなし	馬鹿野郎	豚	間抜け	のろま	与太者	どん百姓
素寒貧	犬	しみったれ	破落戸	怠け者	頓馬	戯け	ならず者	とんちき
気違い	ペテン師	乞食	ルンペン	どけち	抜け作	猫っかぶり	薄鈍	追剥
者	溝鼠	ごくつぶし	インチキ野郎	間抜け	呑んだくれ	怪物	ぐうたら	冷血漢

呆けなす オタンコナス ど阿呆 人でなし 意気地なし 泣虫弱虫挟んで捨てる 野
蛮人 一人よがり ほらふき ボンクラ 海坊主 神憑 泥棒 妄想狂 お喋り 獣
木偶の坊 強欲爺 オタンチン 人非人 げじげじ親父 唐変木 くるくるパー 低能
白痴 道楽者 気取屋 寄生虫 欲張り のっぺらぼう 怒りんぼ 田舎者 偽善者
小便垂れ 暴君 極道者 虫けら おぺっか使い アンポンタン 糞爺 おっちょこち
よい 鬼 疫病神 小心者

忠義者は影法師たちに捕らえられてしまう。真っ二つに折られる忠義者の剣。だが老人にはどうすることも出来ない。それを見ながら、自分の武器である罵倒語が役に立たなかったことを知った若い道化は、老人に向かって罵倒語を叫び、老人の許を去って行く。

若い道化の罵倒語 2

能なし 禿頭 腰抜け 偏執狂 狸 ビンボケ 太っちょ 愚図 アル中 糞蠅 卑怯
者 地獄 屁っこき 糞づまり スカタン 人喰い お人よし 貧乏神 喰いしんぼ
チビ エッチ スットントン 恥知らず 税金泥棒 意地悪 守銭奴 女たらし 石頭
浪費家 がにまた 生臭坊主 極悪人 薄馬鹿 どたくれ 色気違い 出来損い 蝮

ハレンチ 変質者 露出狂 すっとんきよう 嘘つき 小便たれ

へ音の精霊へは老人を庇って去り、若い道化はくり返す

若い道化の罵倒語3

耄碌爺 薄情者 役立たず

耄碌爺 薄情者 役立たず

この場面の間、玉座に座った長女は、嘲笑を浮かべながら出来事を見ている。

影法師たちに捕らえられた忠義者に、長女は、

長女 死にたい？

と、訊く。

長女 忠義者のまま、死なせてあげましようか？それとも寝返って、馬小屋の番人にでもなる？
なりたい？

長女の言葉に耳を貸さず、必死に訴える忠義者。

忠義者 王は……、

長女 王は？

忠義者 王であった時、余りに世の中の事を知らずにいました。今、あなたによって玉座を追われた王は、無名の老人。そうして世間を知ろうとしているのです。王であった老人の眼には、

見たくないことも見えます。王の命令によって、苦しんでいる人々が見えます。見たかったことも見えます。王の命令によって、喜んでいる人々が見えます。老人には……、

長女 老人には？

忠義者 見ることだけが愉しみ。苦しんでいる人々を見ても、喜んでいる人々を見ても、今の王は無力です。何もできません。ですからどうか、老人をそっとしておいて下さい。今さら王を捕まえようなどとはなさらないで下さい。お願いです。玉座に座る、あなた……、王よ……。

長女 どうかしらね。あの老人に持たせてやったお金が失くなれば、彼は私に小遣いをくれと、やってくるわ。老耄仲間を集めて、負けるとわかっていている戦いを挑んで来るかも知れないわ。一度は追放した、下の娘を許し、結婚させ、押し寄せて来るかも知れないわ。

家来 どんなことが起きても、あなたは勝ちます。

長女 そうね、勝つでしょう。でも……。

家来 でも……？

長女は忠義者に言う。

長女 見て愉しむことが老人の特権なら、私はそれすら奪うわ。老人は、唯、大人しく留守とい

う名の鳥籠に飼われていればいい。悪いことも良いことも見て愉しむのは、権力を持つ者だけに許された特権。老人に眼は必要ないと報告するがいい。

家来を呼ぶ長女。

長女 私の家来。この男の眼を奪って。

家来 仰せのままに。

忠義者の体を身動きさせなくする家来の影法師たち。

家来は逡巡いもなく忠義者の眼を刀で突き刺す。

忠義者 私の眼は潰されても構わない。だが、どうか、あの方の眼だけは、あの方の……。

懇願するが答えない長女。

長女 お前の剣は、もう折られた。お前の眼は、もう潰された。折られた刀を杖に、見えぬ眼で、あの方を探すといひ。

折られた刀を忠義者の前に投げ出す家来。忠義者は、それを手さぐりで探し、辛じて歩
き出す。

忠義者の彷徨。

玉座から遠のいてゆくと、仏の化身のように琵琶法師が現れ、「盲人徳談経」を弾き語
る。

盲人徳談経

祈りなされ や 祈りなされ

祈りなされ や 祈りなされ

四方の仏に 祈りなされ

盲人なればこそ 見えるものがある

盲人なればこそ 見える人がいる

祈りなされや 祈りなされ

祈りなされや 祈りなされ

琵琶法師を伏し拝む忠義者。

現れて来た地の母たちが忠義者を見送る。

よろめきなぎら歩き出す忠義者。

へ音の精霊が現れ、怒りの曲を奏すると、老人が足音も荒くやって来、玉座の長女に近づく。

老人 私は、お前の父だ。お前を作った者だ。お前は私に育てられ、言葉を覚えた。

長女 はい、お父様。あなたは私を膝に乗せ、可愛いと言う言葉を教えながら、裏切り者の首を刎ねろと仰言いました。私を眠らせ、楽しい夢をごらん、という言葉をお教えながら、あいつの領土を奪え、と、仰言いました。私は良い言葉と悪い言葉を同時に覚えたのです。そうして今、私は、あなたに、言葉を贈りましょう。

ふっと笑う長女。

長女 愚かで独りぼっちの老人を、生かすことも殺すことも、それが愉しい遊びだったら、殺すことの方を選んだからと言って、どうしてそれが罪悪なの？

笑いさざめく、家来、長女の影法師たち、家来の影法師たち。

激怒する老人。

老人 お前は私の、血を分けた娘だ。私はお前に人の道を教えて来た筈だ。

長女 娘に物を教えるのは、風に米を蒔くようなもの。何にもならない。何の役にも立ちません。

老人 お前は、もう、私の娘ではない……。

長女 私が玉座に就いた時、父と娘の、長くて深い掟は、破られたのです。道を失くした、あなた。迷児の、あなた。あとは洪水の餌食にでもなるといい。

不意に口調を変えて告げる長女。

長女 地獄へ続く魔道の刻印は、もう押されたのよ。天地無限？ 天地有限？ 天地は有限よ。

私は、生きている内に、楽しみたいの。男たちの眼が私に吸い寄せられる若い内に力を振りたいの。そう、若い内、若い間に。……出て行くのね。もうここに、あなたの居場所はない！

返す言葉を持たず、打ちのめされて歩き出す老人。

覚束かなげな足取りだ。

そして、玉座から遠ざかる内、それぞれ違った方向から、折れた刀を杖にした忠義者と

老婆の道化が現れて来る。

忠義者 眼は？あなたの眼は？

老婆の道化 潰されちゃいないよ。だが、何も見えちゃいないようだ。

へ音の精霊へが哀しげな曲を奏しはじめる。

哀しみの余り、言葉を失い、舞う老人。

忠義者と老婆の道化は、老人の胸中を代弁するように言う。

忠義者 世の中から消えるのに時間はかからなかった。

老婆の道化 世の中から消えるのに時間はかからなかった。

忠義者 あちこち彷徨い、終の栖も見つからず、家族もいない。

老婆の道化 あちこち彷徨い、終の栖も見つからず、家族もいない。

忠義者 この世は只、仮の宿。

老婆の道化 この世は只、仮の宿。

忠義者 人間とは一体なんなのか？ 誰に理解できよう。

老婆の道化 人間とは一体なんなのか？ 誰に理解できよう。

忠義者 その謎を解く糸口に思われるので、
老婆の道化 その謎を解く糸口に思われるので、
忠義者 人は人を愛するのかも知れない。
老婆の道化 人は人を愛するのかも知れない。
忠義者 だが出来事が終われば、すべては虚しい。
老婆の道化 だが出来事が終われば、すべては虚しい。
忠義者 何もかも……。
老婆の道化 何もかも……。

へ音の精霊へは笛を吹きやめる。

老人は舞いやめる。

忠義者と老婆の道化は言葉を断つ。

沈黙。

一陣のつむじ風が吹き過ぎて行く。

ぽつりと呟く老人。

老人 私の人生は終わった……。

項垂れる忠義者。

すると不意に老婆の道化が立ち上がる。

老婆の道化　私は生きてるよ。

そうして老婆の道化は言う。

老婆の道化　水の流れと身の行く末は

流れゆく日のうたかたか

血風すさぶこの荒野

水で浄めよ　その邪心

深山幽谷　花一輪

この世で　栄華を得られぬのなら

鬼にもなろう　夜叉にもなろう

因果は巡る小車の

巡り巡って地獄に行つて

冥府の王となるがいい

そう言い切った老婆の道化は、

老婆の道化　私は一人で生きて行くさ。

と、くり返しながら、老人、忠義者と別れて行く。

不自由な体で老人を立ち上がらせる忠義者。

二人は、へ音の精霊の音楽に導かれるようにして、老婆の道化とは反対の方へ去って行く。

この場面の間、玉座に座る長女に命じられて玉座を離れてゆく家来、長女の影法師たち、家来の影法師たちの姿が仄かに見えている。

長女は玉座に孤りだ。ふっと寂し気に、常は隠している孤独を歌う。

長女の歌Ⅰ

寂しさを閉じ込めた 硝子玉

手に乗せて 私はそれを見ている

落とせば 割れて

寂しさが 飛び散るから

飛び散れば私は

寂しさに 閉じ込められて

しまうから

決して落とさずに 瞞めている

決して落とさずに 瞞めている

寂しさを閉じ込めた硝子玉

硝子玉……

硝子玉……

玉座から離れた場所に集まっている家来と家来の影法師たち。

独語する家来。

家来 俺は暗闇を怖れている。陽ざしの中では見える、あいつの眼が見えないから。あいつの眼は俺を映し出す鏡。そこに映るものは信頼。だが、その中に含まれている裏切りに、あいつは気付いていない……。

家来は、影法師たちに言う。

家来 なるほど、王はあいつに変わった。

頷く影法師たち。

家来 だが、そのことによって人々の暮らしはよくなったか？

揃って首を振り、否む影法師たち。

案来 それは、王が王の暮らししか知らず、飢えたことがないからだ。私の父は言った。我が家の生活は、荷馬車で支えている。昼も夜も、汗水垂らして働いている。運ぶものは他人の荷物。道端で飯を喰い、舞い立つ埃の中で居眠りをする。馬は言うことを聞かず、目的地に着けば、荷物の上げ下ろし。肩と背中が痛い。骨と肉が疼く。それが私の人生だ。お前は、私のような人生を選ぶな。嘘という武器を使え、お世辞を学べ。だから俺は、ここまで来た。だが俺は、ここで終わりにしたくない。あいつに、王を殺させ、それから俺は王になる。飢えを知る王。飢えを知る者たちの中から、新しい王を選ぶのだ。

一斉に腕を上げ、賛同する影法師たち。

家来 今日まで我々は国を持たない軍隊だった。だが明日は私たちが国だ。……笑ってやろう。騙されやすい女もいるものだ、と。

哄笑する家来と、影法師たち。

だが、その出来事は、あちこちに隠れた長女の影法師たちに盗み見られ、盗み聞きされ

ている。

そして家来と家来の影法師たちは、そのことに気付かずにいる。

家来 さあ、帰ろう。裏切りのために。

家来と家来の影法師たち、そして長女の影法師たちは玉座の長女の許へと帰って行き、虚偽の戯れがはじまる。

家来たちが去ると、次女が現れ、母を呼ぶ行為をする。
現れて来る母と地の母たち。

次女は母の胸にすがり、母は次女を抱きしめる。

母（花）によって語られる風の詩。

その中で踊られる、母の舞いと地の母たちの舞い。

次女は、凝っとそれを見ている。

風の詩

風

風が

風が吹いている

風が吹いている海

風が吹いている海の

風が吹いている海のそばに

風が吹いている海のそばに私が
風が吹いている海のそばに私がいて
風が吹いている海のそばに私がいて 食べている
風が吹いている海のそばに私がいて 飲んでいる
風が吹いている海のそばに私がいて 舐めている
風が吹いている海のそばに私がいて 舐めている
風が吹いている海のそばに私がいて 風を

母は次女の耳に何事かを囁く。

頷く次女。

彼女は一人で玉座に近付いて行き、母と地の母たちは去って行く。

次女を見、嘲るように訊く長女。

長女
何？

すると次女は、はじめて口を開き、姉に懇願する。

次女
……これ以上、父様を非道い目に遭わせないで、苦しめないで、そっとしておいて……。

表情を固くする長女。

長女 ……言葉、言葉を使ったのね。言葉を使って私に命じたのね。

次女 私には、思い出があります。母様が歌ってくれた、子守唄。父様が教えてくれた、子守唄。

そして次女は子守唄を歌いながら踊る。

次女を凝視する長女の眼に浮かんで来る妬心。たまりかねて長女は叫ぶ。

長女 いつ？ いつのことなの？ そんな思い出は、私にはない。……思い出を殺して！

剣を抜こうとする家来。

それを見て、長女は命じる。

長女 剣で殺すのは、剣を持つ男だけ。手で殺すのよ。

家来は踊っている次女の背後に近付き、首に手をまわして力をこめる。

抗おうとはしない次女。

次女 ……父様を……救って……。

そう言い遺して次女は死んでゆく。

そして同時に倒れる長女の影法師（虚栄）。

虚栄 ……私の名は虚栄。あなたの中の虚栄は死んだ。でも、あなたは気付かない。

長女は言う。

長女 父の許に送りつけるがいい。どんなに嘆こうと、もう手遅れ。そのことを思い知らせるためにね。

家来の影法師たちは、次女の亡骸を運んでゆく。

激しい足取りで現れて来る老人。

見えぬ眼で、老人を追ってくる忠義者。

老人は悲嘆の余り、狂ったように激しく舞う。

老人の詩

怒りの神が ましますならば

我のこの身に 降りてくれ

嘆きに勝る 力をくれ

雷いかずちの神よ 我とともに轟け

地を揺るがせ 海を鳴らし

邪悪な娘を 怖れさせてくれ

雨の神よ 我とともに哭け

天より地に降り 溢れ出で
邪悪な娘を 溺れさせてくれ

風の神よ 我とともに吹き荒れよ
木という木から 葉を奪い
娘の邪心を 吹き払ってくれ

老人の舞いを、能のワキのように沈黙して瞞めている盲目の忠義者。
やがて老人が地に倒れ伏すと忠義者は言う。

忠義者 私には見えません。あなたが見えます。盲目の私と一緒にでは、あなたの足手纏。私は終生
あなたを見ながら、どこかで生きて行きます。

そして去って行く忠義者。

へ音の精霊へは、それを見送る曲を奏する。

この場面の間、玉座に座った長女と寄り添う家来。足許の影法師たちが、酒盃を上げて

いる様子が朧気に見えている。

地に倒れ伏していた老人は、へ音の精霊へに助け起こされ、足許も覚束なげに去って行く。

玉座では長女が家来の手を弄んでいる。

玉座の傍らで、同じ行為をしている、長女の影法師と家来の影法師たち。

長女 あなたの手……、あなたの指。私の妹を殺した手と指。どんな気がした？

家来 彼女の頸は細かった。柔らかかった。呆気ない程に脆かった。細く、柔らかく、脆く、そして、

長女 そして？

家来 肉、だった。殺す私の手の肉と殺される彼女の頸の肉。肉と肉が生と死を分けた。私は、

長女 あなたは？

家来 嬉しかった。

長女 何故？

家来 あなたの役に立った。

長女 感じていたわ。あなたの手が妹の頸に喰い込んで行く時、私の手の肉は妹の頸の肉を感じていた。

家来 私の肉は、いつでもあなたの肉。

長女 妹は消えた。

家来 霧の中で。

長女 沈黙の鳥は死んだ。

家来 過ぎ去った春の日。

長女 遊んだ芝生は枯れた。

家来 姉妹と言う名の塔は崩れた。

長女 未明の光が、

家来 柔らかな鞭で、

長女 闇を追い払い、

家来 暗い暗い闇の底から、

長女 夜が明ける。

家来 今や王は狂人……。私たちの時代が来たのです。古い世代は倒され、新しい世代が訪れたのです。

長女 あなたと私の、時代。

家来 あなたと私の、時代。

ふっと沈黙する長女。

家来 何を考えているのです？

長女 あなたのこと。

家来 私のこと？

長女 そう。

剣を取る家来。鞘から抜くと刀身が煌めく。

家来 この剣で私の胸を切り開いてお見せしましょうか？

私の中にいるのは、あなただけ。

長女は家来の手から剣を取る。

長女 水の底以上に、人の心は、わからないものよ……。

呟くと、いきなり家来の首を刎ねる。

家来 ……豚奴！

ただ一言を残し、死んでゆく。

同時に倒れてゆく家来の影法師たち。

長女 私は体の渴きを癒しただけ。心は渴いていないわ。私の心は父殺しの欲望でいっぱい。左の拳に裏切りを隠し、右の手で私を抱いて来た、お前。お前と一緒に父を殺す？ いいえ、私の父殺しは私だけのものよ。私のためだけ。そして私は、私自身の王になる。私は権力の塔を積み上げる。妹を殺して、一つ積み、家来を殺して、二つ積み、父を殺して、三つ積む。王国の空は、青い……。

長女の表情に拵がって行く笑い。

そして、長女の影法師（不測）が死んで行く。

不測 私の名は不測。あなたの中の不測は死んだ……。でも、あなたは、気付かない。

現れて来る老人。

老人は、「妻よ……」と譚語のように呟きながら座り込む。

老人 どこにいるのか、妻よ。お前がいる処へ私も行きたい。

その呟きに呼応するように、面をつけた地の母たちが現れて来る。
流れ込んで来る歌。

流れ込んで来る歌

記憶

記憶

私は記憶

記憶の中の青い鳥

その歌の中で、地の母たちは、老人に母の面をつける。
老人は《母》となり、言う。

母
人は、愉しかった記憶が一つあれば、老いてからもそれを思い出して生きてゆくことが出来る生き物。存在。どうか、私たちが愉しく暮らした日々を思い出し、生きて下さい。……生きて下さい。例え、天が老いても、私たちの愛は老いません。聴こえませんか？ 記憶の河のほとりで歌う声。愛が歌っているのです。

再び流れ込んで来る歌。

流れ込んで来る歌

明日
明日

私は明日

明日の中の青い鳥

その歌の中で、地の母たちは、老人から ”母” の面を外す。
ゆっくりと笑む老人。立ち上がる。

老人 生きて行こう。空が私の命を召すまでは。お前は充分に生きた、と言うまでは。

老人は決然と、玉座に座る長女の許へと歩いて行く。

去って行く、地の母たち。

父を迎える長女。

長女 何のために帰って来たのです？

老人 生きるために。

長女 私には、もう必要のない人。

老人 玉座には、お前が座るといい。私は、庭の隅に庵を作り、そこに住もう。

だが長女は、首を振って否む。

長女 私には母はない。父は要らない。私は運命の捨小舟に乗ってこの世に送られて来た、神の娘。あなたは、既に私の傀儡。老いて無力な醜い案山子。そして私は、力の傀儡子。傀儡が傀儡に操られ、木偶の影舞、踊るがいい。赤い血潮の雛嬰粟が私の地獄に咲き誇る。我は不幸の子なりけり。死んでください、お父さん。死んでください、お父さん！

叫んで父を刺す。

長女 鶏頭の首無し of 茎流したる 川こそ渡れ 我が地獄篇！

狂笑する長女。

長女 あなた殺して私になって、今日から私は私自身の王。
老人 時が逆に流れて、過去を覗くことが出来れば……。

呟く老人。

老人 命の松明は夜を照らす。そうすれば夜は昼になる。だが私の松明は私の闇を照らすことが出来なかった。私の心は、闇だ、夜だ……。

言い残して死んで行く老人。

長女の影法師（野望）は彫像のように立ち尽くしている。

無人となった王国に孤りぎりの長女。

長女は、玉座を撫で、呟く。

長女 死者たちが、夜毎、亡霊となって枕辺に現れて来る。無言のまま訪れて来る。……眠れな

い……。沈黙の夜……。不眠の夜……。私の夢は短く中断される。

だが長女は、自らの呟きを打ち消すように強く言う。

長女 望んで得た力、権力、王国。私は強い。私は若い。死者たちが生きている私に、何が出来る？ 無言の凝視。だが私には言葉がある。消えろ、と命じる言葉を持つ。そう……。私は言葉の力で死者たちを追い払い、好きなように生きて行くことが出来る。私が座り続けて来た、この玉座。今、この玉座から立ち上がったって、ここに座ることの出来る者は一人もない。

ゆっくりと立ち上がる長女。

長女は、玉座を凝視する。

長女 血塗の玉座……。夕間暮れ、ほのかに花の色を見て、その花は血の色をしていた……。

無人の玉座に空から射して来る一筋の血の色。
そして薄暮が訪れる。

長女 孤独……。

呟く長女。

その言葉とともに、最後まで立っていた、長女の影法師（野望）が、ゆっくりと倒れて行く。

野望 私の名は野望。あなたの中の野望は死んだ。そして、あなたは、そのことに気付いた。

倒れた野望を見る長女。

長女は、歌いはじめる。

長女の歌 2

勝つために

妹を殺した

父を殺した

私は勝利を手に入れた

でも……

空は

昼に太陽を持ち

夜に月を持つ

月のない夜は星々を持つ

海は

波を持つ

波上には舟が浮かんでいる

風が吹けば

木々の葉は風とともに舞い

風が吹きやめば木々の葉も静まる

池を見れば

鴛鴦が仲睦まじく

餌を啄んでいる

けれど私は家来を殺した

体だけを愛して 心を信ぜず

今の私に愛はない

私は孤り

空白の勝利に囲まれて

孤り

うしろの正面
だあれ？

うしろの正面
だあれ？

うしろの正面
誰がいる

長女は、「うしろの正面、だあれ？」とくり返し、ふっと歌いやめる。

視線は、虚ろだ。

孤独の狂気に襲われたのか？

長女は呟く。

長女 ……母さん……。救けて。

すると現れて来る母。

母は、妹殺し、家来殺し、そして父殺しの罪人である長女を抱きしめ、言う。

母 人は人から生まれ、でもやがては土に還るもの……。お前を許し、土に還りましょう。

今、地の上には、長女と母しかない。

長女を抱きしめ、やさしく笑む母。

母の腕の中で、

長女 鳥になりたい……。

呟く長女。

長女 翼をつけて飛んで行きたい。千里万里の彼方まで。鳥よ、運んでおくれ。鳥よ、一緒に飛んで。私が土となるところまで。

頷く母。

母は、そっと長女の体を離し、飛翔の舞いを舞う。

凝視している長女。

やがて、自らもまた、舞いはじめる。

長女の父殺しから、ずっと長女を見ていたへ音の精霊が歌う。

へ音の精霊の唄

地の母

母なる大地

そして次々に現れて来る地の母たちが、母と長女の舞いに加わる。
やがて姿を見せる琵琶法師。

琵琶を禅きはじめる。

地の母たちは舞いやめ、唱えはじめる。

地の母たちの唱和

羯諦羯諦

波羅羯諦

波羅僧羯諦

菩地娑婆詞

母たちの唱和がくり返される間に現れて来る人々。

次女。

家来。

老婆の道化。

若い道化。

忠義者。

長女の影法師（野望）。

長女の影法師（不測）。

長女の影法師（虚栄）。

家来の影法師たち。

琵琶法師は、死者も生者も、なべての存在を慰撫するように弾き語る。

琵琶法師の弾き語り

彼岸へ行った者よ

彼岸へ行った者たちよ

悟りよ 祝福あれ

生きる者よ

生きて在る者たちよ

生きる喜びに 祝福あれ

祝福あれ

祝福あれ

耀う光。

舞台は光に包まれてゆく。
了。

へもう一つのエンディング

琵琶法師の弾き語り

彼岸へ行った者よ

彼岸へ行った者たちよ

悟りよ 祝福あれ

弾き語りの間に地の母たちは、“母”の面を取る。すると、“母”は老人となる。

老人は長女を抱きしめる。

長女 ……お父様……。

老人 お前に、許す、という言葉を教えよう。

琵琶法師は弾き語りを続ける。

琵琶法師の弾き語り

生きる者よ

生きて在る者たちよ

生きる喜びに 祝福あれ

祝福あれ

祝福あれ

耀う光。

舞台は光に包まれてゆく。
了。

定本

『鳥よ 鳥よ 青い鳥よ 岸田理生戯曲集Ⅲ』

二〇〇四年八月二十五日第一刷発行

有限会社而立書房